

俳句雜誌

空

空

令和3年1月31日発行

第18巻6号

通巻第94号



2021・1

SORA 94号

三十五句(2)

柴田佐知子

大寒や鬼と呼ばるる刀鍛冶

抱ふれば鶏熱き霜の朝

指示を待つ獵犬すでに息荒し

七曜の固まり過ぐる襜袍かな

炉話に山野の神がやつて来し

峡抜けてより雪原の列車かな

奈落より迫り上がりくる雪女

一切の色奪はむと吹雪きけり

真夜中のホームに立つは雪女

奈落また白一色と雪をんな

人肌に触れて消えゆく雪女

梟の鳴けば応ふる井戸の底

三辺の空きし炬燵となりけり

夜の咳この世に一人残さるる

燃え尽きて欲しき我が骨冬がすみ

何ひとつ得ず失はず冬野ゆく

―「俳壇」一月号より―

寒晴の灘を卑弥呼となりて見る

玄海の紺を樹間に弓始

―「俳句」十二月号・一月号より―

長崎 仲里奈央

運命の一冊に逢ふ秋日和
 秋の風一人の時間かき集め
 今日のは良き母で終はれず秋の暮
 冬すみれ人見知りでも人は好き
 幾度も味見ねだる子冬隣

大阪 田岡千章

手花火のをはりのしづく胸に落つ
 夕かなかな連添ひ五拾余年かな
 西暦で応ふる生年赤のまま
 畑南瓜耆貫伍陌の男振り
 胸せを訝る眼秋暑し

東京 今井康子

耳痛きまで林中の蟬しぐれ
 土器を放つ蟬しぐれの谷へ
 迷路めく唐草模様秋暑し
 新涼や梅干ひとつ粥に乗せ
 威し銃北齋住みし空震へ

北九州 兒玉充代

澄む秋や加ふる色なき万華鏡
 沖かけて七分の出来の鱒雲
 どこまでも声届きさう秋の海
 鉦叩灯すに早くなりにつけり
 夜は夜の風が吹くなり虫時雨

兵庫 大西乃子

合せ酢の匂ひ厨に涼新た
 迎火や戦後は母と路地住まひ
 曲りても曲りても月明の道
 くせつ毛は父譲りなり秋彼岸
 実柘榴やもう羽目外すこともなく

福岡 あさなが捷

喜寿となるいまだに短氣一位の実
 湧水に寒鯉を飼ふ菜も洗ふ
 大小はかまはずみかん袋詰め
 童謡をゆるく流して灯油売り
 その後のうはさは聞かず雪をんな

京都 天谷翔子

来世ある思ひ泉の湧き出づる
 弾きたる雨溜めてをり未草
 星祭触れ合ひもせず告げもせず
 岬まで鯛のこゑ聴きにゆく
 歪なる時間流るる月光裡

直方 吉田悦子

友あらば顔のほころぶ冷やし酒
 退院の母待つ母の浴衣干し
 雨の間に青々と蝉生まれけり
 父の亡き家に風入れ盆支度
 盆団子いびつもありて仏前へ

東京 山田 正子

赤まんま幼なじみも髪白き
牧場は一軒となり草もみぢ
腕白は棒切れが好きねこじやらし
水引きし跡まつ先に緋のカンナ
火口壁芒のほかは何もなし

北海道 押田 裕見子

ともす灯の強く優く初螢
露の玉こぼれひとつの星となる
月涼し妣との距離の縮まりぬ
ふと妣を思ふ日数や秋深む
未練とや憎し恋しとはたた神

兵庫 えとう 樹里

黒揚羽母の匂ひを連れて来ぬ
旅に失す母愛用の夏帽子
もういつこ空の花火を欲る子かな
八月尽祈り足りぬ吾置き去りに
仕込みのカレーBGMと秋の風

兵庫 岡村 尚子

水溜りに鳩が水浴ぶ長崎忌
初盆や夕べ真白き波頭
七階の風に来てゐる赤とんぼ
三人の子に背を越され竹の春
鶴鴿の川沿ひを行く杖二つ

兵庫 岩井 京子

凜とせしひとの訃句誌に花芙蓉
青たうがらしやや濃く煮つけて昼餉
思ひ出す団扇絵旅の風の盆
蝉盛ん樹々の梢を飛び交ひて
進めない百足虫ひつくり返されて



空集抄——柴田佐知子抄出

初夢や亡き夫に問ふ餅の数

中田みなみ

一線を退く馬や秋の雲

高倉和子

封切れば飛び出しさうな蝮酒

曾根富久恵

昨夜の荒れ残る大灘牛蒡引く

深川淑枝

敬老日好きで老いたるには非ず

角野良生

崩れ築水にまみれて流さるる

松田明子

いちまいの和紙のしづけさ蜘蛛の網

戸栗末廣

水音の変はらぬ暮し盆仕度

山本則男

夕月や子を叱るたび自髪増え

仲里奈央

行く手みな積乱雲や旅鞆

青木朋子

白雲に鳶の孤影や秋澄めり

石川子熊

取り残されしごとき静けさ夏座敷

山内碧

茸狩りや父の手書きの地図たどり

林徹也

蛇穴に入りたる後の雨の日々

田代民子

服はぬものは誅せし曼珠沙華

永淵恵子

つま先でこらふる言葉鴉の声

えとう樹里

秋風や半農半漁の通し土間

横田敬子

万緑や定めあるなら立ち向かふ

荷宮克代

接客の卓そのままに昼寝かな

青木和男

水かけてやりたく庭の墓探す

林れい

休耕田に息吹き入るるトラクター

畑由子

コスモスや地球の空はひと続き

石井みゆき

うつろひていつしか母は陽炎へ

小林朱夏

猫抱いて台風避難の友来る

本松陽子

口笛は男のものぞパナマ帽

松尾康代



空集作品評

柴田佐知子

初夢や亡き夫に問ふ餅の数

中田みなみ

今は一個ずつパックされた餅を電子レンジでふつくとさせ簡単だが、以前は雑煮とは別の鍋で罫の走った固い餅や冷たい甕から掬いだした水餅を煮てやわらかくしていた。いくつ食べるかと数を問うのは今も昔も変わらない。

みなみさんは初夢で亡き夫に「餅はいくつ召し上がりますか」と尋ねているところで目覚められたのだらう。思いがけない初夢に、なつかしさと、ほんのり混じる寂しさの余韻に暫く身を横たえていらっしやったことであらう。

一線を退く馬や秋の雲

高倉 和子

一線から退くとあれば、人のことだろうかと思っただが馬だ。確かに麻葉探知犬など多くの動物も人の仕事を支え第一線で働いている。

この馬は速さを求められ、第一線を走り続けてきた競走馬であらう。和子さんは引退レースでの雄姿をテレビで見ているのだろうか。その後の競走馬に、澄んだ秋の空が広がる地が用意されていればいいなと思われたかもしれない。〈秋の雲〉というあっさりとした季語が置かれたことで、読む者はそれぞれの景や思いを存分に広げることとなる。

封切れば飛び出しさうな蝮酒

曾根富久恵

田舎の親類の住む村では、蝮を見つけると生け捕りにして七分目ほど水を張った一升瓶に入れ、一週間ごとに水を入れ替えていた。一ヶ月ほど経つと、一升瓶の中で水から首をもたげて生きている蝮を、きれいな一升瓶に移しかえて焼酎を注ぎ入れた。蝮は絶命して、蝮酒の出来上がりだ。

蝮酒を取り出すと、とぐろがゆらりと廻り鎌首が立ち上っている。まさに〈封切れば飛び出しさうな〉姿だ。あんなひどい目に合った蝮だ。飛び出して噛みつきたくもなろう。〈飛び出しさうな〉は写生に基ついたりリアルな表現だ。

空集

柴田佐知子選

観念の姿は円し蝮酒

太陽の匂ひ広げし朴落葉

東京 中田みなみ

走り根と間違へさうな穴惑ひ

大根の曲るに合はせ引きにけり

右向けば夫の横顔台風圏

雁木町行けど洩れくる声もなし

鰯雲河口の町は平たくて

暦より七曜抜けし日向ぼこ

神と鳶棲む岬山秋澄めり

北九州 深川 淑枝

初撮りへ漣送る池の鳥

昨夜の荒れ残る大灘牛蒡引く

初夢や亡き夫に問ふ餅の数

蛸畑の秋茄子舟板囲ひなる

沐浴のあとの身ほとり秋の風

福岡 高倉 和子

島裏はジュラ紀の断崖夕根釣

芒原最後の足を抜いて出る

八朔や纜の端の縊りゆるみ

一線を退く馬や秋の雲

夜も干す網の匂へり虫しぐれ

負けさうな顔で始まる草相撲

炎天を来て炎天を引き返す

福岡 角野 良生

稲光山を半分押し出せり

レガッタに勝ちたる權を立てにけり

菊人形声を殺して討ち合へり

仏壇の桃の座りを正しけり

夏蝶についてしばらく家を出る

直方 曾根富久恵

人覗くものを覗けり放生会

封切れば飛び出しさうな蝮酒

敬老日好きで老いたるには非ず